

「地域スポーツ」という社会  
インフラを作り変えたい！



桑田 健秀

[ヒホットフット理事長/  
元モントリオール五輪バスケットボール日本代表]

東京オリンピック・パラリンピックを通じて、コロナ禍での無観客という前代未聞の状況下であっても、オリンピアンが躍動する勇姿を垣間見て、スポーツの可能性を感じた方は多いのではないか。

いま、日本のスポーツビジネスは転換期を迎えています。私が現役のバスケットボール選手だった頃に比べると、スポーツを行う環境は充実しています。実際、全国には3000近くの地域スポーツクラブがあり、社会インフラの一つになっています。ところが、せっかく構築したこのインフラをうまく活用しきれていないのが現状なのです。

スポーツで生計を立てられる  
ようにしたい——。これが引退  
後の私のミッションです。成  
熟した日本に置いて、これまでの  
ような学校体育や企業スポーツ  
だけで成立させることは非常に  
難しい。その要因として、スポー  
ツを通じてしっかりと採算をと  
るという事業性を考えるリーダ  
ーがおらず、それに携わる関係  
者も行政からの補助金に依存し  
てしまふことに抵抗を持つてい  
ないことが挙げられます。

スポーツで生計を立てられる  
ようになりたい——。これが引退  
した日本のミッショングです。成熟  
した日本に置いて、これまでの  
ような学校体育や企業スポーツ  
だけで成立させることは非常に  
難しい。その要因として、スポ  
ーツを通じてしつかり採算をと  
るという事業性を考えるリーダ  
ーがおらず、それに携わる関係  
者も行政からの補助金に依存し  
てしまうことに抵抗を持つてい  
ないことが挙げられます。

子育て支援、高齢者福祉、産業振興といった縦割りの行政組織の横ぐし、そして地域行政、地域企業、地域住民をつなぐ横ぐし。この3つの横ぐしを使って地域をつないでいけるのです。

私はモントリオール五輪出場から26年が経った2002年、日本鋼管を辞めて地域スポーツの活性化に寄与しようと無収入からスタートしました。

子育て支援、高齢者福祉、産業振興といった縦割りの行政組織の横ぐし、そして地域行政、地域企業、地域住民をつなぐ横ぐし。この3つの横ぐしを使つて地域をつないでいけるのです。

私はモントリオール五輪出場から26年が経った2002年、日本鋼管を辞めて地域スポーツの活性化に寄与しようと無収入からスタートしました。

実際に自分でやってみると、次々と地域スポーツの課題を感じました。「地域スポーツのインフラを作り変えたい」。自然と自分が目指すべき目標が定まってきたのです。49歳のときに当法人を設立し、今では年間約200回のスポーツ教室を開催する地域スポーツクラブになりました。種目もバスケットボールだけではありません。チアリーダーやダンスなども行っており、指導するのはその道のプロです。

さらに地元の大田区という共通点から「企業対抗運動会」を企画・開催。大田区は日本有数の中小企業集積地で、約4千の

地域性を生かし、企業ごとにチームを結成した運動会も開催したりしています。健康経営がテーマである企業にとつてもメリットを感じてもらいました。

こういった取り組みは全国どこでもできるはずです。ただ、そこで重要なのが指導者のマネジメントの能力です。単にスポーツができるだけではいけません。相手の立場に立ってお互いが双赢・双赢となる提案ができなければ、周囲を巻き込むことはできません。

何よりもスポーツは子供を本身とともに成長させるものです。それはスポーツにしかできないと思っています。スポーツは子供の成長はもちろん、コミュニケーションづくりにも社会課題の解決にもつながることができる可能性に満ち溢れたものなのです。いかに周囲を巻き込んで盛り上げていくか――。

その軸足（ピボットフット）になることが私の役割と使命だと思っています。

2021.10.6 財界 118